

道の駅への期待

経験したことの無い驚愕の出来事でした。1995年に発生した阪神・淡路大震災です。震源地にある大学にいた時で、恐ろしさに身がすくみました。大震災の起きた日、周辺の家屋は倒壊し、ライフラインが全て途絶え、絶望的な気分に見舞われたのは今も鮮明な記憶です。

同時に妙な感覚も覚ええました。被災地では皆が冷静に、次々と被災者を運ぶ救急車の通る道を確保しようと協力していました。私も思いのほか冷静になりました。私も思いのほか冷静になりました。私にも驚き、日本人には災害に対応できる遺伝子が備わっているかと確信しました。そんな体験から道の駅の防災問題に強い関心を持ったのです。

道の駅に出合ったのは約10年前、大学院で地域活性化の研究に携わり、奈良県でまちづくりの活動をしていた頃です。人口減少と高齢化が進む町の活性化を探っていて、地域の魅力の発信拠点として注目されていた道の駅に興味を持ちました。

防災機能 全ての駅で充実を



コロナ禍でも地域の賑わいを取り戻したいと望む地域住民の、熱意と創意工夫が反映される制度だからでしょう。

全国の道の駅を報道するルートプレスを知り発行元のNPOの役員になって、2013年春に仙台市で開かれた国連の世界防災会議のパブリックフォーラムで、発表の機会をいただきました。以来、全国の道の駅を訪れるようになり、これまで訪れた駅は100駅余り。どこも

コロナ禍でも月に1度は道の駅を訪れ、地元の方々の話を伺っています。道の駅研究を続けてこられたのは、道の駅の関係者、地元の生産者らにお会いして、温もりに触れられるからです。郷土愛と優しさについても感激し元気をもらっています。

特色ある取り組みをしており、駅を訪れば地域の風土、文化、歴史が分かり、地元の地域愛が伝わってきます。

防災道の駅制度のスタートで大震災の体験がよみがえり、道の駅の防災機能が全ての駅で充実することを強く望みます。今後は道の駅の海外展開に携わりたいと考えており、日本発祥の道の駅が世界に展開し、世界の防災、貧困・飢餓問題を解決する契機になればと願います。

新型コロナウイルスの感染拡大で人の移動が制限され、経済活動が大きく落ち込んで、めげずに頑張っている道の駅もあります。道の駅が、地域を愛し、

後には道の駅の海外展開に携わりたいと考えており、日本発祥の道の駅が世界に展開し、世界の防災、貧困・飢餓問題を解決する契機になればと願います。